

研究会のあゆみ（2010年5月26日～2010年10月20日）

第156回：10年5月26日（水）

脇山佳奈 「四川省における少数民族の鏡について」

2009年度活動の報告及び2010年度の活動について

第157回：10年7月28日（水）

安部雪乃 「フィリピンの民主的な政治への挑戦とその影響について～今回の選挙とParty List制度を中心に」

第158回：10年9月2日（水）

板倉和裕 「インド制憲過程におけるマイノリティの政治的保障措置をめぐる論争」

第159回：10年10月20日（水）

西井美穂 「シュタイナー神秘主義における倫理性について」

本研究会は、総合科学研究科並びに社会科学研究科、国際協力研究科のアジア地域を研究対象としている大学院生及び研究生によって企画・運営されています。研究会での議論の成果の一部がこの論文集となっています。

バックナンバー目次

アジア社会文化研究 第1号

2000年3月

巻頭言

論説

| | | |
|----------------------|-------|----|
| 朝鮮半島の南北分断と「敵対双方」の観光化 | 崔吉城 | 1 |
| 台湾の祭祀圏と信者ネットワーク | 上水流久彦 | 13 |
| 「日語読本」に関する一考察 | 上田崇仁 | 37 |

研究動向

| | | |
|-----------|-----|----|
| 観光人類学研究動向 | 李良姫 | 55 |
|-----------|-----|----|

書評

| | | |
|-------------------------|-----|----|
| 西成田豊『在日朝鮮人の「世界」と「帝国」国家』 | 福井讓 | 67 |
| 정재경『일본의 논리』(鄭在貞『日本の論理』) | 鄭泰暎 | 77 |

彙報

アジア社会文化研究 第2号

2001年3月

論文

| | | |
|---------------------|------|----|
| 朝鮮戦争における国連軍と売春 | 崔吉城 | 1 |
| 日本植民地支配下における文学言説試論 | 桂文子 | 17 |
| 現代韓国社会における火葬と「考」の理念 | 中村八重 | 41 |

研究ノート

| | | |
|-------------|------|----|
| 近代中国のリベラリズム | 水羽信男 | 55 |
|-------------|------|----|

書評

| | | |
|------------------|------|----|
| 佐藤由美『植民地教育政策の研究』 | 山田寛人 | 75 |
|------------------|------|----|

彙報

アジア社会文化研究 第3号

2002年3月

論文

| | | |
|-----------------|------|----|
| 韓国演戯の展開様相 | 尹光鳳 | 1 |
| 北朝鮮の対日外交の特質 | 福原裕二 | 17 |
| 韓国における‘国立墓地’の形成 | 池映任 | 47 |

研究ノート

| | | |
|-------------------|-----|----|
| 在日韓国・朝鮮人における差別と国籍 | 金根五 | 63 |
|-------------------|-----|----|

資料と通信

| | | |
|-------------|------|----|
| 林亨泰文学会議について | 三木直大 | 81 |
|-------------|------|----|

彙報

アジア社会文化研究 第4号

2003年3月

論文

| | | |
|---------------------------------|-------|----|
| レザー・シャー独裁下の あるリベラルな政治家の役割と限界 | 吉村慎太郎 | 1 |
| パキスタンの民族問題に関する一考察 | 近藤高史 | 30 |
| 在朝日本人二世の 朝鮮・朝鮮人に対する意識形成の研究 | 曹龍淑 | 50 |
| 1990年前後における台湾での同化教育について | 安達信裕 | 81 |

研究ノート

| | | |
|---|-----|-----|
| フィリピン・ビサヤ民俗社会における 力・主体・アイデンティティに関する予備的考察 | 関恒樹 | 105 |
|---|-----|-----|

書評

| | | |
|---|-------|-----|
| 山路勝彦・田中雅一編著『植民地主義と人類学』 | 崔吉城 | 122 |
| 洪郁如『日本の植民地統治と「新女性」の誕生』 | 上水流久彦 | 131 |
| 栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編 『越境する知6 知の植民地：越境する』 | 桂文子 | 135 |

彙報

アジア社会文化研究 第5号 崔吉城先生退官記念号

2004年2月

巻頭言

崔先生退官記念特集

| | | |
|------------|-----|----|
| フィールドノートから | 崔吉城 | 1 |
| 先生の学問を回想して | 尹光鳳 | 12 |
| 崔吉城先生業績一覧 | | 18 |

論文

| | | |
|--|-------|-----|
| ラジオ「国語講座」と「国語」教育 | 上田崇仁 | 31 |
| 親族関係の分析にみる訃聞の資料的価値 | 上水流久彦 | 44 |
| 日朝「平壤宣言」への道 | 福原裕二 | 69 |
| 韓国国立墓地における戦死者祭祀に関する一考察 | 池映任 | 97 |
| チベットの山神崇拜と村落社会 | 別所裕介 | 124 |
| Bangladesh のイスラーム聖者廟における 歴史伝承と系譜的事実 | 外川昌彦 | 146 |

研究ノート

| | | |
|------------------------|------|-----|
| 1950年代日・米・台関係研究と台湾所蔵資料 | 前田直樹 | 167 |
|------------------------|------|-----|

研究動向

| | | |
|-----------------|------|-----|
| 1940年代中国の都市と知識人 | 水羽信男 | 182 |
|-----------------|------|-----|

書評

| | | |
|--|-----|-----|
| 삼인 『재일조선인 그들은 누구인가』 (サミン『在日朝鮮人 彼らはどういう人々なのか』) | 福井讓 | 194 |
|--|-----|-----|

卒業生名簿

彙報

アジア社会文化研究 第6号

2005年3月

論文

| | | |
|----------------------|-------|-----|
| プロト儀礼の体系 | 外川昌彦 | 1 |
| バングラデシュにおける開発援助と伝統工芸 | 岡田菜穂子 | 43 |
| 中村地平『太陽征伐』論 | 阮 文雅 | 75 |
| 満州映画「嵐はこわい」考 | 崔 吉城 | 121 |

研究ノート

| | | |
|-------------------------------|------|-----|
| パキスタン・スィンド州における 「ムハージル」の変容 | 近藤高史 | 137 |
|-------------------------------|------|-----|

研究動向

| | | |
|-----------|------|-----|
| 小笠原学研究の現在 | 李 健志 | 151 |
|-----------|------|-----|

史料紹介

| | | |
|--------------|------|-----|
| 尾道乃木神社に関する覚書 | 八幡浩二 | 171 |
|--------------|------|-----|

彙報

アジア社会文化研究 第7号

2006年3月

論文

| | | |
|------------------|------|----|
| 李恢成文学におけるサハリンの風景 | 金 在国 | 1 |
| 逃げ去る男たち | 羅 玠旻 | 17 |
| 「日本語人」の群像 | 李 郁蕙 | 38 |
| 謝罪行為における差異 | 鄭 加禎 | 57 |
| 韓国の臓器移植における儒教 | 中村八重 | 74 |
| 隠岐島の伝承歌謡について | 李 建志 | 92 |

研究ノート

| | | |
|---------------------------------|---------------|-----|
| 英国教会伝道協会と J.R.ウォルフ に関する初歩的考察 | マーティン・ ウード | 108 |
|---------------------------------|---------------|-----|

書評

| | | |
|-------------------------------|------|-----|
| 鄭雅英『中国朝鮮族の民族関係』アジア政経学会 | 権春花 | |
| | 李玉丹 | 125 |
| 権恵永『在唐新羅人社会研究』一潮閣 | 近藤浩一 | 131 |
| 방기중 편『일제 파시즘 지배정책과 민중생활』혜안 | | |
| (方基中編『日帝ファシズム支配政策と民衆生活』慧眼) | 福井 譲 | 140 |

彙報

アジア社会文化研究 第8号

2007年3月

論文

- | | | |
|--|-------|----|
| チベットの英雄叙事詩「リン・ケサル大王伝」と 地域伝統の再編をめぐる一考察 | 別所裕介 | 1 |
| 庄司総一の『陳夫人』に見るハイブリッド文化の 葛藤 | 王 暁芸 | 39 |
| 中島敦と朝鮮 | 李 月順 | 67 |
| 台湾の古蹟指定にみる歴史認識に関する一考察 | 上水流久彦 | 84 |

研究ノート

- | | | |
|-----------------|------|-----|
| 少数民族の集住地域から大都市へ | 金 成子 | 110 |
|-----------------|------|-----|

資料紹介

- | | | |
|---|-----|-----|
| 大森直樹「『満州事変』の中国東北教育への影響」 とその関連資料をめぐって | 周 軍 | 127 |
|---|-----|-----|

書評

- | | | |
|--|------|-----|
| 土佐昌樹・青柳寛編『越境するポピュラー文化と <想像のアジア>』めこん | 大久保豊 | 136 |
|--|------|-----|

彙報

アジア社会文化研究 第9号

2008年3月

論説

| | | |
|---------------------|------|----|
| 墓と故郷 | 越智郁乃 | 1 |
| 武者小路実篤『若き日の思ひ出』論 | 楊 琇媚 | 29 |
| 中国の語文教育 | 三野園子 | 49 |
| アフガニスタン政治と国内統一原理の変転 | 古川直樹 | 77 |

資料紹介

| | | |
|---------------------------------------|------|-----|
| 『見聞録』・『聖宗遺草』及び 『夜窗鬼談』と『聊齋誌異』との比較研究 | 陳 炳崑 | 115 |
|---------------------------------------|------|-----|

書評

| | | |
|------------------------------------|-------|-----|
| 松田康博『台湾における 一党独裁体制の成立』慶応義塾大学出版会 | 川原絵梨奈 | 127 |
| 段瑞聡『蒋介石と新生活運動』慶応義塾大学出版会 | 水羽信男 | 133 |

彙報

アジア社会文化研究 第10号

2009年3月

シンポジウム「地域研究を問い直す」特集号

(文理融合型リサーチマネージャー養成プログラム企画)

巻頭言—シンポジウムの趣旨について

講 演

グローバル化の時代の地域研究—その魅力と意義 加藤 博 1

報告内容

戦争言説と近代文学に関する一考察 何 資 宜 4

フィールドとのかかわり方を考える 光 武 昌 作 9

エッセイ

「地域研究を問い直す」とは—シンポジウム参加記 水 羽 信 男 16

「地域研究者」の条件 吉村慎太郎 18

地域研究に対する質問 その1, その2 荒 木 一 視 21

春風の中に坐するが如し 荒 見 泰 史 24

認識の再考—地域研究を通じた現地との対話 上 水 流 久 彦 37

文学研究あるいは言葉の教育と「地域研究」 川 口 隆 行 40

南アジア研究から見た地域研究の可能性 外 川 昌 彦 44

時間・民俗との出会い 丸 田 孝 志 49

シンポジウムを振り返って 三 木 直 大 52

論 説

「墓の移動」を通じた「沖縄」研究の再考 越 智 郁 乃 57

「竹島」に見る韓国・韓国人イメージ 福 原 裕 二 73

研究ノート

「新台湾人」の議論と政治意識をめぐって 川原絵梨奈 103

書 評

高橋伸夫『党と農民—中国農民革命の再検討—』 丸 田 孝 志 115

研文出版

彙 報

アジア社会文化研究 第11号

2010年3月

尹光鳳先生退職記念号

尹光鳳先生退職記念特集

| | | |
|---|------------------|------------|
| 尹光鳳先生業績一覧 | | 1 |
| 神楽との出会い | 尹 光 鳳 | 5 |
| 論説 | | |
| 舜子変文類写本の書き換え状況から見た 五代講唱文学の展開 | 荒 見 泰 史 | 12 |
| 中国都市部における民族教育に関する一考察 “変”から“変文”へ | 金 成 子 高 井 龍 | 37 58 |
| 芥川龍之介の「河童」にみる「狂気」 ダライラマ14世の平和プランとチベット高原域の “文化的領有”をめぐる検討 | 陳 玫 君 別 所 裕 介 | 83 108 |
| 国共内戦期冀魯豫区の大衆動員における 政治等級区分と民俗 | 丸 田 孝 志 | 133 |
| 研究ノート | | |
| 暦と韓国 『清平山堂話本』から探る敦煌変文の 後世の話本小説に与えた影響 | 崔 吉 城 徐 銘 | 162 167 |
| 書評 | | |
| 張涌泉主編『敦煌経部文献合集』（中華書局） | 荒 見 泰 史 | 180 |
| 李建志『日韓ナショナリズムの解体』（筑摩書房） | 中 村 八 重 | 185 |
| 「20世紀中国」政治史——新刊2冊の紹介と批評 | 水 羽 信 男 | 189 |
| 尹光鳳『日本神道と神楽』（テハック社） | 尹 祥 漢 | 195 |

彙報

『アジア社会文化研究』投稿規程

1. 『アジア社会文化研究』の目的

『アジア社会文化研究』はアジア社会文化研究会において発表・議論された成果をもとに編集される論文集であり、2000年3月の創刊以来、これまで年1回のペースで刊行されている。同研究会は、アジア研究にかかわる者が専門分野の枠をこえて学際的に討論し研究の幅を広げることを目的に、広島大学大学院総合科学研究科に所属する教員および大学院生を中心に設立・運営されている。

2. 投稿資格

原則として本研究会の目的に適い、本研究会にて発表した者とする。なお編集委員会（ならびに院生の場合には当該指導教官）が質的に掲載に十分値すると認めた論文の投稿申し込みを受理し、掲載の可否については厳正な査読制をしることとする。

3. 論文集完成までの過程

- (1) 投稿希望者は8月31日までに所定の用紙（「投稿申込書」）で申し込むこと（電子メールによる添付書式も可）。
- (2) 投稿希望論文の提出期限は11月1日までとする。
- (3) 投稿希望者は本年度の研究会において、投稿論文の主題に沿った発表を少なくとも一度以上行わなければならない。ただし海外居住者や遠隔地に居住する者、また長期に渡り海外での調査活動に従事している場合などは、編集委員会での審議を経たのちに、レジュメ等の提出で発表に代える。
- (4) 発表と投稿論文の提出を終えた者から随時、査読制による審査を受け、そこでの結果により、掲載の可否が決定される。
- (5) その後、編集作業（投稿論文の加筆・修正を要請することがある）を経て、翌年の3月末日に刊行する。

4. 執筆要項

(1) 掲載論文の種類および分量

①論説：16000～20000 字程度（400 字詰め原稿用紙で 40 枚～50 枚程度）

②研究ノート：12000 字程度（同 30 枚程度）

③研究動向・調査報告・資料紹介等：8000 字程度（同 20 枚程度）

④書評：4000 字程度（同 10 枚程度）

(2) 書式等

原則として「ワード」横書き（34 字×30 行）で、本文を記述する言語は日本語に限る。なお、引用など必要に応じた他言語の使用は認める。なお、規定の書式から著しく外れたものは投稿を受理できない場合がある。

(3) 原稿の提出方法と提出先

投稿希望者は上記①～④に該当する原稿を「ワード」またはテキストファイルで作成し、編集委員会宛に以下のものを提出すること。

(a) 電子メールの添付ファイルもしくは CD-R など

(b) 印刷したもの 1 部（直接・郵送いずれも可）

なお投稿申し込みが受理された場合、投稿者は編集委員会の指示に従うものとする。

5. 書式の設定

(1) フォント・文字サイズなど

| | |
|-------|-------------------------------|
| タイトル | MS ゴシック フォントサイズ 11 |
| 章見出し | MS ゴシック |
| | 1. 2. 3. ... (全角, フォントサイズ 10) |
| 節見出し | MS ゴシック |
| | (1) (2) ... (半角, フォントサイズ 9) |
| 本文 | MS 明朝 フォントサイズ 9 |
| 数字・英文 | 章, 節見出し以外は全て「Century」 |
| 脚注 | 文末脚注 脚注番号は「アラビア数字」で設定 |

| | |
|------|--------------------------|
| 参考文献 | 必要に応じて「脚注」の後に別途に掲載 |
| 連絡先 | 論稿末尾に執筆者の電子メールを記載（希望者のみ） |

(2) ページ設定

「ワード」：ツールバーの「ファイル」→「ページ設定」にて設定

| 文字数と行数 | 余白 | 用紙サイズ |
|------------|-------------|---------------------|
| 文字数 34 | 上 30mm | 用紙サイズ A4 印刷の向き 横 |
| 行数 30 | 下 30mm | |
| フォント MS 明朝 | 外 20mm | |
| フォントサイズ 9 | 内 25mm | |
| 段数 1 | とじしろ 0 | |
| 横書き | ヘッダー 15mm | |
| | フッター 17.5mm | |
| | 印刷の向き 袋とじ | |
| | とじしろの位置 横 | |

問い合わせ（編集委員会）

アジア社会文化研究会代表：三木直大（広島大学大学院総合科学研究科教授）

naomiki@hiroshima-u.ac.jp

アジア社会文化研究会：owner-asiasyabunken@freeml.com

『アジア社会文化研究』（第 号）投稿申込書

年 月 日

| | |
|-------|--------|
| 名 前 | フリガナ |
| | 日本語名 |
| | 英語名 |
| 所 属 | |
| 連 絡 先 | 住 所 |
| | 電 話 |
| | E-mail |

1. 投稿を希望する原稿の種別（○をつけて下さい）

| | | | | | | | | | |
|----|--|-----------|--|----------|--|----------|--|----|--|
| 論説 | | 研究 ノート | | 研究 動向 | | 資料 紹介 | | 書評 | |
|----|--|-----------|--|----------|--|----------|--|----|--|

2. 原稿題目（仮題目でも可）

| |
|------------|
| 日本語（主題と副題） |
| 英語（主題のみ） |

3. 原稿要旨（400～600字程度で記入して下さい）

| |
|---|
| <div style="border-bottom: 1px dotted black; margin-bottom: 5px;"></div> <div style="border-bottom: 1px dotted black; margin-bottom: 5px;"></div> <div style="border-bottom: 1px dotted black; margin-bottom: 5px;"></div> <div style="border-bottom: 1px dotted black; margin-bottom: 5px;"></div> |
|---|

執筆者紹介（掲載順）

- 岡田菜穂子 広島大学アクセシビリティセンター特任助教
永見和子 広島大学大学院総合科学研究科博士課程後期
部谷由佳 広島大学大学院総合科学研究科博士課程前期修了
（現在 MAROJAP S.A.R.L.&フェアトレードショップ サハラへの道）
王坤 広島大学大学院総合科学研究科博士課程後期
川原絵梨奈 広島大学大学院総合科学研究科博士課程後期
水羽信男 広島大学大学院総合科学研究科教授
三木直大 広島大学大学院総合科学研究科教授
宇田禮 中国近代詩研究・詩人

編集後記

昨年尹光鳳先生退職記念特集号をもって、本『アジア社会文化研究』も2000年からの歴史を閉じて良いのではないかと、という意見もあった。事実、「地方大学」にとって、昨今の現実には院生を中心とする学術雑誌の継続的な出版を著しく困難にしている。そうしたなか、それでも、やはり自分たちの雑誌を守りたいという熱い声におされて、12号の編集作業が始まった。

本号は前号の編集長・三木直大先生を引き継いで僕が担当したが、不慣れなうえに生来の「馬馬虎虎」さで、査読者の方々をはじめ執筆者にも多大のご迷惑をおかけした。この場をかりてお詫びしておきたい。

編集作業を通じて、改めて本誌の特徴を実感することになった。それを僕なりにまとめれば、第一に多様なディシプリンの論文を集めることで、学際的な地域研究を進めるうえでの「討論の場」たりうる可能性を持っていることである。今回は書評を掲載することができなかったが、学界動向整理などを含めて、若い人を中心として、ディシプリンを超えた議論のきっかけとすることができれば、本誌にも存在価値は十分あるといえよう。

第二に本誌は研究ノートや小特集などといった形で、さまざまなジャンルの原稿を掲載している。査読を前提としてではあるが、研究会をベースにするがゆえの「自由」が本誌にはあるように思われる。したがってある人にとって本誌は、博士論文執筆のための一里塚として、積極的な意味をもつであろう。あるいは通常の学会誌では掲載しがたい原稿も、内容的に充実していれば、いわば学術的な情報の保存庫として本誌に掲載することも可能である。その意味で我々の「アジア社会文化研究会」の活動記録を残すことにも、少なからぬ意味があると編集作業を通じて感じた次第。

本誌に関心をもった人はどうぞ僕たちの研究会のウェブページにアクセスし、メーリングリストに参加してみてください。新しいメンバーの参加を心よりお待ちしております。

(水羽信男)